

東山区栗田口高台寺山町地内発見の白磁について

赤松 佳奈・内田 好昭

はじめに (図1)

本稿は、令和2年2月に寄付された鎌倉時代の中国産白磁碗の発見経緯についての記録およびその紹介である。当該資料は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所（以下、研究所）の元職員・故本彌八郎氏の夫人から研究所に寄付されたもので、その経緯については研究所の内田が聞き取り調査を行った。

この結果、研究所設立以前の分布調査で発見されたものであることが明らかになったため、その経緯について文化財保護課の紀要にて紹介し、その実測図と写真を掲載する。

1. 寄付受納までの経緯と経過

令和2年1月28日に本彌八郎氏の夫人より研究所に連絡があった。彌八郎氏の遺品を整理していたところ、遺物のような茶碗が見つかったので返納したい。という趣旨で、添付された写真には「東山 リョウ山カンノン東山山頂 S.53? 本・玉村」と記載された袋が写っていた。このため対応した内田が昭和53年の記録類を確認したが該当する図面等は見つからなかった。なお、袋書きの「玉村」は元京都市文化財保護課職員の玉村登志夫氏と推定された。

同年2月3日に本氏が遺物を研究所に持

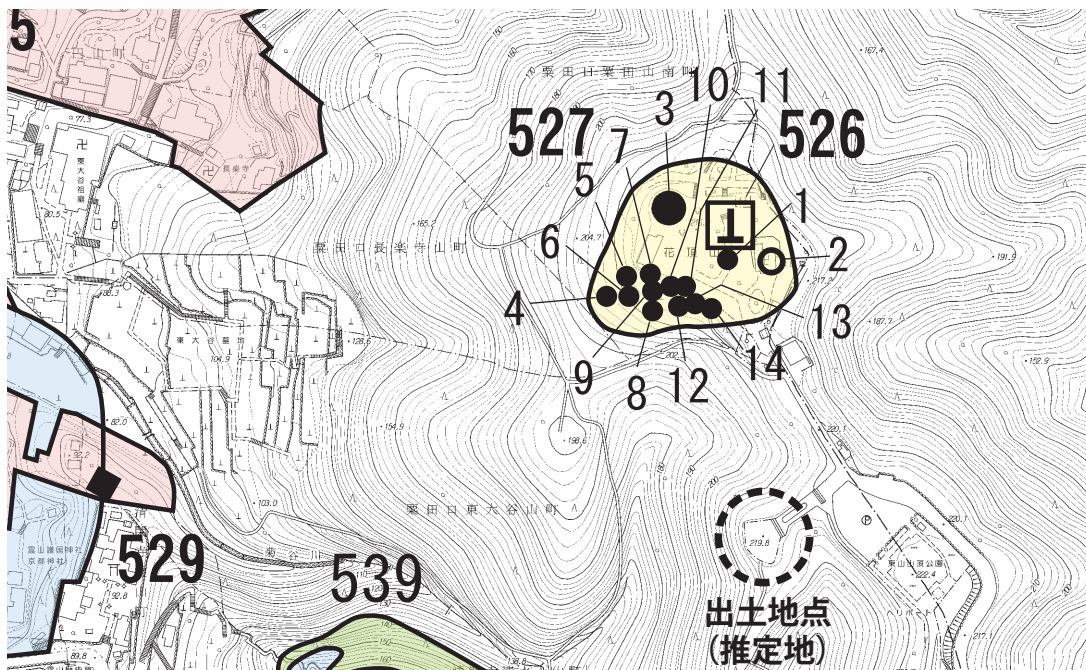


図1 調査位置図 (1:5,000)

参された。確認したところ鎌倉時代、中国宋代の白磁椀で良好な遺存状態であった。経緯と遺物の貴重性から研究所で受領することとした。

2月4日に玉村氏に連絡したところ、当時の状況を覚えているとのことであり、翌5日に研究所で聞き取り調査を行った。

以下は玉村氏の証言である。

記憶によれば「S 53？」は誤りで、昭和47年の踏査時の採取品である。研究所の設立以前、平安京調査会の時の仕事である。田辺昭三先生が『京都の歴史 第1巻』を書き終えた頃に、京都市内の遺跡をよりよく把握するため分布調査を提案し、その一環で調査を実施した。本氏と私は二人で東山山中を歩き当該資料を発見した。大日堂（將軍塚）付近と記憶していたが、彌八郎氏の記録に「リョウ山カンノン東山 山頂」とあるので、もう少し南だったかもしれない。採集時は口縁部を下にして伏せた状態で埋没していた。高台部分のみ地上に露出していた。当時はこのような磁器は、すべて近世以降のもののみなされることが多かったので、重要な埋蔵文化財と考えなかったかもしれない。それで分布調査の対象外としたのかもしれないが、彌八郎氏は美大出身であったこともあり、当該遺物が気になって持ち帰ったものであろう。

とのことであった。

発見年については玉村氏の記憶の昭和47年と推測されるが、発見場所については本氏の袋書き「リョウ山カンノン東山 山頂」を重視し、現在の京都市営展望台の付近と推測しておく。

2月5日文化財保護課馬瀬係長と協議の

上、京都市考古資料館を受納先として寄付受納を受け入れることとし、2月13日付けで寄付申出書を受け入れた。

2. 推定地付近の歴史的な背景

東山三十六峰の一つである華頂山山頂に位置する大日堂および將軍塚付近は周知の埋蔵文化財包蔵地「將軍塚古墳群」に該当する。この範囲で平成25年に実施した試掘調査¹⁾では平安時代末頃の中国産白磁四耳壺を利用した火葬墓が確認されている。

華頂山から清水山を経て鳥辺山に続く東山の西斜面一帯は、鳥辺山付近のみに留まらず広義の「鳥辺野」に含まれる葬送地と推測され、清水寺の裏手の山にはかつて中世の作善行為によって作られた石仏が多数散布していた²⁾。

今回の遺物採取推定地は、本氏の記録によれば霊山観音東山山頂であることから、現在の京都市営展望台付近と推測された。当該地点は現時点では包蔵地に指定されていないが、歴史的な経緯を考えれば、この付近にも墓や塚が多数存在したと考えられ、今後踏査などで遺構が確認されれば包蔵地に加わることもある地域と言えよう。

3. 採集資料について

寄付受納された資料は、中国産の白磁椀である（図2）。口径16.0cm、器高6.4cm、やや膨らんだ腰部と強めに外反する口縁部が特徴的で、施釉は高台端部まで丁寧にかけており、口縁端部は施釉後に釉剥ぎされている。所謂口禿の白磁である。当該

遺物に相伴資料は無かったが、市内での発掘調査では京都の土師器皿編年³⁾の7Aから7C段階の土師器皿にともなって出土することが多い。西暦では13世紀の後葉から14世紀前半までの年代観であり、鎌倉時代の遺物である。高台を上にして埋まっていたという経緯から、壺類を転用した蔵骨器の蓋であった可能性が高いと考えられる。口縁部に少し欠損があるが95%以上遺存する良好な資料である。

おわりに

葬送地「鳥辺野」の範囲と東山西斜面の墓・塚類については、考古学的な調査が追いついておらず、葬送地としての著名さに反して実態は分かっていない点が多い。また、東山付近は清水寺をはじめ現代の一大観光地であり、山中は開発が少ないものの往時の景観はかなり失われた状態になっている。そのような中で、今回寄付を受けた資料は、鎌倉時代の中国産白磁であり、遺存状態も良く、聞き取り調査から中世墓に伴うものである可能性が高い良好な資料である。また、所謂口禿白磁の椀は、同じ特徴を有した皿類に比べると出土点数が少なく完形に近い資料はあまり無い。資料そのものも重要と言えよう。

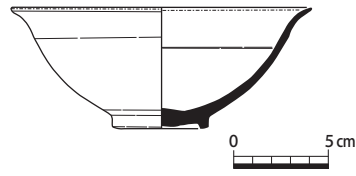


図2 白磁椀 実測図



図3 白磁椀 写真(1)



図4 白磁椀 写真(2)

昭和47年当時、中世の遺物は、考古学研究の俎上にのぼっておらず、貴重なものと予感して数十年保管して下さった故本彌八郎氏の直感と記憶のあるうちに袋書きを加えてくれた遺物への誠意に感謝を申し上げ、ここに記録を残したい。また、連絡をくださった御夫人のご理解・ご協力と、記憶を掘り起こしてくださった玉村登志夫氏に感謝申し上げます。

あかまつ かな (文化財保護課 文化財保護技師)
赤松 佳奈
うちだ よしあき (京都市考古資料館 副館長)
内田 好昭

註

- 1) 「3. 将軍塚古墳群」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局2014
- 2) 川勝政太郎

- 3) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2019